塩害研究の第一人者集う国際会議SWBSS-ASIA2023の開催

一般に遺跡は原位置で周辺の地盤とつながった状態で保存されます。そして、それらの多くは風雨から遺跡を保護するための覆屋が設けられています。その結果、遺跡周辺の地盤に浸透した雨水は、覆屋内部の遺跡表面で蒸発し続けます。このとき、水に溶けていた成分が遺跡表面で塩として析出するため、遺跡を構成する石などの表面が粉状に破壊される塩類風化が生じます。遺跡に施された彫刻や絵画、あるいは製作時の痕跡が失われるため、塩類風化は屋外で保存されている世界中の遺跡にとって大敵です。

SWBSS（Salt Weathering of Buildings and Stone Sculptures）は建造物や石造文化財における塩類風化という研究テーマに特化した国際会議で、2008年に第１回の会議がコペンハーゲンで開催されて以降、３年おきに欧州の都市で開催されてきました。日本国内でも遺跡の塩害が大きな問題となっているため、共同研究者とともに2014年の会議から参加して参りました。そして、塩害研究に取り組む研究者ネットワークを欧州だけでなくアジアも含めて構築することを目的として、本会議をSWBSS-ASIAと題してアジアで初めて奈良文化財研究所で開催しました。会議は９月20日から22日の３日間にわたって開催され、９ヵ国53名の方々に参加いただきました。ハンブルク大学のMichael Steiger教授、上海大学のLuo Hongjie教授による２件の基調講演にくわえて、27件の口頭発表と11件のポスター発表がおこなわれ、活発な議論と情報交換の場を持つことができました。

（埋蔵文化財センター　脇谷 草一郎）

参加者全員での記念撮影

飛鳥資料館でのイベント「日光写真を作ろう」の開催

飛鳥資料館で2012年から開催している写真コンテストでは、毎回テーマにあわせて作品を募集し、展示しています。2023年は関連イベントとして「日光写真を作ろう」を企画・開催しました。

「日光写真」は、紫外線に反応して変色する薬品を塗布した紙の上にモチーフを配置し、それを太陽光で焼き付けて制作します。本イベントでは、モチーフに当館の展示品や今回の写真コンテストのテーマ「飛鳥のくらし」に関わる風景写真などを使用しました。遺物や景観に触れながら写真作りを楽しんでもらうことを狙いとしました。

品質の高い日光写真を簡単に作ってもらうため、事前に作業手順や使用する器具の試行錯誤を繰り返しました。これらの準備や運営には写真室から協力と助言を得ました。イベントは８月29、30日の午前と午後の計４回、当館の庭園と講堂で開催し、のべ30人が参加しました。

自分でデザインした写真が鮮やかな青色に変わる瞬間には、参加者から歓声が上がりました。アンケートでは「またいきたいくらいたのしかったです」、「初めてあすか資料館にきたけどかんたんだったし楽しかった」、「大学院生でも楽しめる内容でよかったと思います」などの感想が得られました。なかには１日目に参加し、２日目にも友人を誘って再度参加してくれた小学生もいました。集客や広報面での課題は残りましたが、今回の成果と課題を踏まえ、今後のイベント開催につなげていきたいと考えています。

（飛鳥資料館　竹内 祥一朗）

飛鳥資料館庭園で焼き付けた写真を水洗する参加者